opusdei.org

## 年間第12週日曜 日・C年99神への 愛と畏敬の念

一神への愛とその無限の聖性をすなおに受け入れる。一子どもとしての畏敬の念。これは、罪を忌み嫌うため不可欠。一「神への聖なる畏れ」とゆるしの秘跡。

2024/04/28

年間第12週日曜日·C年

99神への愛と畏敬の念

- 一神への愛とその無限の聖性をすなおに受け入れる。
- 一子どもとしての畏敬の念。これは、罪を忌み嫌うため不可欠。
- 一「神への聖なる畏れ」とゆるしの 秘跡。
  - 99.1神の愛と畏敬の念

「神よ、あなたはわたしの神

わたしはあなたを捜し求め

わたしの魂はあなたを渇き求めます

あなたを待って

わたしのからだは渇ききった大地の ように衰え

水のない地のように渇き果てていま す」

私たちは、ミサの答唱詩編で祈りま す<sup>1</sup>。 主である神にもっと近づくた めに、私たちは一致して、完成した 2つの固い岩の礎(いしずえ)に頼らな ければなりません。信頼と恭(うやう や)しい崇敬、親密さと敬虔な服従、 愛と畏れ、それらは、「私たちが神 を抱くための2本の腕である|<sup>2</sup>と、 聖ベルナルドは教えています。私た ちは、いつくしみと優しさに満ち、 真実のあらゆる善に満ちておられる 御父である神に心惹かれています。 私たちは、無以下の存在だと分かっ ていますから、絶対的に卓越し、高 尚な威厳に満ちた神に、謙遜に頭を 下げるのです。自分の意志を神に従 わせ、神の正義にかなった罰を畏れ ます。今日のミサで、私たちはこう 祈ります。「あなたのみ名に対する 尽きない私たちの尊敬を、主よ、お 聞き入れください」<sup>3</sup>。愛と子とし ての聖なる畏れは、私たちを高く飛 翔させる二つの翼です。

主を畏れることは知恵の始め⁴と聖 書は教えています。また、これはす べての徳の基礎になります。「心か ら主を畏れ敬わなければ、その家 は、驚くほど急速に落ちぶれてい く | <sup>5</sup>からです。キリストご自身、 友人に、体を殺しても、その後、そ れ以上何もできない者どもを恐れて はならないと教えられています。 「だれを恐れるべきか、教えよう。 それは、殺した後で、地獄に投げ込 む権威を持っている方だ。そうだ。 言っておくが、この方を恐れなさ い」。使徒言行録は、教会が、 「主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基 礎が固まって発展し、信者の数が増 えていった」<sup>7</sup>と私たちに教えてい ます。大罪から離れれば離れるほ ど、故意の小罪に打ち勝つ努力を多 くすればするほど、神の愛は、さら に強く成長することを忘れるべきで はありません。神に対する畏怖は、 私たちにとって、神に背くあらゆる ことに対して寛大に戦う時の大きな

助けになります。それは、常に、神 に悲嘆と悲しみを与えることを即座 にひるむ、子に相応しい、子として の畏れです。その人は、御父が誰で あるか、罪が何であるか、そして、 罪人に神と果てしない別離を強いる ことがわかっているからです。だか らこそ聖アウグスチヌスはこう言っ ているのです。「主を畏れる魂は幸 いである。それは悪魔の誘惑に強い からです。『いかに幸いなことか、 常に主に畏れを抱いている人は』 (箴言28・14)、主に対する畏れを 常に目に前に置きます。神を畏れる 人は、悪の道を去り、徳の道を歩み ます。神の畏れは人を慎重にし、罪 を避けるために警戒させます。自堕 落な生活は、神の畏れのないところ で凱歌を奏するのです」。8

神の愛と子としての畏れは、私たちが、安全に歩むことができるための同じ態度の2つの側面と言えます。 イエス・キリストの聖なる人間性を

もって私たちに近づかれる神の限り ない優しさを考えると、心は、神を もっと愛するように動かされます。 神の威厳と正義、そして自分の価値 のなさについて深く考えると、私た ちの個人的な罪のために、心底から 愛する神を失い、また、神を悲しま せるのではないかという恐れが沸き 起こってきます。ニューマン枢機卿 は私たちにこう忠告しておられま す。「あなたの生涯の終わりの日ま で、畏れ、愛し続けなさい、と勧め るのです」<sup>9</sup>。その瞬間から、唯一 愛だけが生き続けます。「完全な愛 が畏れを追い出します」10。

99.2 罪を根こそぎにするために 子としての畏れは大切

神に対する聖なる畏怖は、真の愛の 保証であり支えです。それは、私た ちが大罪を決定的に絶つための助け となります。神を畏怖しているな ら、私たちが犯した罪を痛悔して、 故意の過失を犯さないようになりま す。「自分の犯した罪に値する罰を 恐れることは、日々の困難と、放棄 や戦いに立ち向かうために日々努力 を傾ける勇気を与えてくれます。周 囲にある多くの罪の機会、自分のひ どい欠点、過度の愛着と習慣、わが まま気ままへの自然の傾き、内部か らは自分の情欲に引っぱられ、世間 に引きずられること、自分の多くの 過失と欠点、毎日犯すちょっとした 不注意について考えれば、私たちに は、確かに、常に神への畏れを身に しみて感じ取るべき理由が多くある のです $\rfloor^{11}$ 。このような個人的な弱 さに直面する時、畏れないでいるこ とができるでしょうか? 限りない神 の優しさに信頼しないでいることが できますか?

子としての畏れがあれば、私たちが 持つ愛情を罪から離し、霊魂が不正 と偽りの自己満足に陥るのを防ぎま す。最も大きな悪とは、正に、犯し た罪を気にせず、ついには、罪の意 識を完全に失わせる思慮のなさと浅 はかさです。偶像崇拝に陥っている ように思われる人々に見られるこの 態度は、神への畏怖を失った結果で す。神に背くこのような嘆かわしい 状態は、笑いものにされ、取るに足 りないこととして、次第に消え失 せ、さもなければ、蔑(さげす)まれ ます。最も重大な常軌からの逸脱 は、「ただ当然のこと」とみなして しまうことです。なぜなら、被造物 とまさにその存在を支えてくださる 創造主との関係が破壊しているから そうなるのです。良心の最も重大な 歪み、したがって人間の本質的な方 向性を歪める原因は、往々にして、 無からすべてを創られた神に対する 〈聖なる敬い〉を失くすことです。

子としての畏れと愛はいつも共にあります。もし子としての神への畏れ、神を喜ばせる望み、神を悲しませないように心を配らないとすれ

神に対する畏れの始まりは不完全な愛です。それは、罰の恐れに基づいています。しかし、この恐れはは、何よりも神の偉大さ、神の限りな状態を黙想するようになる、子どきるとがあるとがである。神を畏れることは、子の御父に対する敬(うやま)いであっ

て、決して奴隷の恐れではない。父である神は暴君ではないからである」 12。それは神を心から愛する子としての畏れに変えられ、この愛から、両親を悲しませ、仲を裂くかも知れないすべてのことを避ける力が出ます。

99.3 ゆるしの秘跡と神の聖なる 畏れ

ゆるしの秘跡に近づく時、神への聖 なる畏怖を大きくする、それは私た ちに大変役立つでしょう。秘跡を受 けるのに、十分ではない理由(超自 然的ですが、罰の恐れから生じる不 完全な悲しみ、または、罪の醜さを 嫌う)で十分です。しかし、霊魂 に、御父である全能の神に背いた子 としての畏れの意識を増していくな ら、もっと多くの恩恵を受けるで しょう。この子どもの態度から、愛 から生じる悔い改め、真の痛悔、愛 に基づく悲しみの態度へと移行する

のはとても簡単です。そうすれば、 告解は、愛が絶えず強くなる場所、 つまり恩恵の限りない源になるで しょう<sup>13</sup>。

神の聖性と私たちの惨めさ、日々の 失敗、創造主に対する被造物の絶対 的な依存、神の聖性を前にした時に 気づく一つの小罪の重大さ、召し出 しの要求に対して實大さに欠ける忘 恩<sup>14</sup>など、聖霊のこの賜物の基礎に なるこれら真理を考えれば、内的生 活はより細やかでより深くなりま す。何よりも主の受難について度々 考える習慣をもっと身に着けていく なら、罪の神秘をもっと良く理解す るでしょう。私たちは、愛すること を教わり、それによって、一つの小 罪をも犯すことを嫌うようになりま す。キリストが、私たちの罪、世界 中の数えきれない罪のために忍んだ 苦しみを黙想する時、私たちの希望 は強められ、痛悔は深められます。 このようにして、私たちは、あらゆ

る故意の過失を避けるようにより固い決心をするのです。

罪びとの拠り所である聖母マリアに、過失がわずかなものであっても、御子イエスに導く道から逸れるたびに、どれほど多くを失うか、しっかりと理解させてくださいと願いましょう。

<sup>≟</sup>詩編63・2

- <sup>2</sup> 聖ベルナルド,On consideration, 5:15
- <sup>3</sup> Opening prayer
- 4 詩編110:10
- <sup>5</sup> シラ27:3-4
- <sup>6</sup> ルカ12:5
- <sup>7</sup> 使徒言行録,9:31
- $^{8}$  聖アウグスチヌス,Sermon on humility and the fear of God
- Cardinal J.H.Newman, Parochial Sermons, 2 4
- 10 1ヨハネ4:18
- B.Baur, Frequant Confession, p5 8
- <sup>12</sup> 聖ホセマリア・エスクリバー, 『道』. 435

<sup>13</sup> 聖ヨハネ・パウロII世, Reconciliatio et poenitentia 3 1 🧃

Reconciliatio et poenitentia, 3 1 参照

\_\_\_ B.Baur, op cit, p. 1 6 0 参照

\_\_ ローマ8:35-39 参照

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/TO-XII-nichi-C/ (2025/12/12)